

教育者・吉田松陰と儒教精神

荒 川 紘

一八五九(安政六)年一〇月一六日、幕府評所は吉田松陰を流罪にあたるとして老中に上申したが、大老井伊直弼は「流」の字を「死」に書き換えた。死罪確定である。江戸・小伝馬町の牢獄でこれを漏れ聞いた松陰は故郷の萩に住む父と親族にあてた訣別の書を書き、いよいよ死の迫っているのを知った二五日から二六日にかけて、門下生への遺書『留魂録』をしたためた。その翌日の朝、評定所への呼び出しがあり、死罪が言い渡される。ただちに、小伝馬町の牢獄にもどされ、午前一〇時ごろ、刑は執行された。数え三〇歳の命は安政の大獄の嵐のなかで武蔵の露と消え、松下村塾を主宰していた吉田松陰の教育活動も終わった。

しかし、松陰を処刑した徳川幕府はその後急速に瓦解への道を歩みはじめた。翌年の三月、幕府の最高権力者として安政の大獄を指揮した井伊直弼は桜田門外で水戸藩の脱藩浪士に暗殺された。それをきっかけにして反幕府の運動は活発化する。私の蒔いた稲粒を実らせてほしいと諭す『留魂録』を読んだ松陰の教え子たちも奮い立つ。もはや目標は討幕しかない。その戦いのなかばで、久坂玄瑞・吉田栄太郎・入江杉蔵・高杉晋作ら多くの教え子が命を落とすが、彼らの先導した討幕の戦いは勝利する。松陰の死から八年後、二六五年つづいた徳川幕府も倒壊した。

時代を変えた吉田松陰の教育活動を私たちはどのように考えるべきなのか。本論では、なにが教育者・吉田松陰を生み

出したのか、をさぐることから松陰の教育の意味に迫りたい。

かつては「教育勅語」を體現した「忠君愛国」の教育者として称えられていた松陰であった。たしかに、松陰は熱烈な尊王論者だった。しかし、幕藩体制下での尊王論者であったことを見落としてはならない。社会の变革に命を賭けた教育者だったのである。その松陰の思想は多くの人間との交遊と膨大な読書によって形成されたのだが、教育者・吉田松陰をその心の底から衝き動かした力は、これは本論の結論であるのだが、武士の教養として幼いときから身につけた儒教の精神にあった。体制維持の学として学ばれていた儒教が体制を覆す思想に転化したのである。学の可能性、そこに現代の教育の危機を克服するための重要な鍵も隠されている、と私は考えている。

1 東北旅行——尊王攘夷論との出会い

長州の萩に生まれた吉田松陰は二〇歳からの後半生の多くの時間を旅にすごした。江戸の獄で三〇歳の命を奪われるまで、獄中と幽閉のときをのぞけば、旅の空の下に暮らしたといつてよい。北は青森、西は平戸・長崎、四国や佐渡にも足をのばしていた。それも物見遊山などではない。人間の精神的成長には読書も必要だが、旅には書物からは求めることのできない効用があると考えていたのだ。それまでは長州のそとに出ることのなかった二一歳の松陰の最初の大旅行は、藩校・明倫館の兵学師範として、平戸の山鹿万介と葉山左内に学ぶためにかけた九州への旅、その旅を記録した『西遊日記』の「序」では、「心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは触に従ひて発し、感に遇ひて動く。発動の機は周遊の益なり」とのべている。「序」の文であるが、旅の後にそのときの実感を綴ったものであろう。旅はつねに遊学であった。

その一年後、藩主・毛利慶親にしたがい、兵学修業のために江戸にのぼった松陰は東北の旅にでる。出発は一八五一（嘉永四）年二月一五日、関所手形の発行が遅れたため、脱藩を覚悟しての決行となった。水戸で兵学家の友人・宮部鼎蔵と合流して、外国船が航行するようになった本州北部を視察するというのが目的、水戸から白河までは、兄の敵討ちのため南部に帰るといふ江幡五郎も同行した。

しかし、松陰には水戸の学者たちと交遊することがもうひとつの目的であったように思われる。六月二日に江戸から兄にあてた手紙のなかで、松陰は、「江戸にて兵学者と申すものは噂程に之れなき様相聞き候事。付り、新論は之あり候へども、未だ手に入り申さず候。官許之なき書故、書肆へは頭はれ申さず候」と書いてある。江戸に出てきたが、師事したい兵学者はいない。それよりも、会沢正志斎の『新論』（九州旅行のおり葉山佐内のところで読むことのできた蔵書の一冊である）を購入したいのだが、発禁本であるため、手に入らないというのである。水戸の尊王攘夷思想をより深く学びたい、直接に水戸の学者と会えるに越したことはない、と考えていたのだろう。

実際、約三カ月半の旅のうちの一月あまりも水戸で過ごし、年末から年始にかけて、会沢正志斎・豊田彦次郎・桑原幾太郎・山国喜八郎らを訪ねている。すべて、尊讓派の水戸学者、藩政改革を強力にすすめた水戸藩主・徳川斉昭の側近たちである。とくに会沢のところには、水戸に着いて最初に顔をだし、その後五回も訪ねるが、すでに七〇歳を超えていた水戸学の重鎮は長州の若者を暖かくむかえてくれた。そのときの印象を、松陰は『東北遊日記』に「会沢を訪ふこと数次なるに率ね酒を設く。水府の風、他邦の人に接するに款待甚だ渥く、歛然として欣びを交へ、心胸を吐露して隠匿する所なし。会談論の聴くべきものあれば、必ず筆を把りて之れを記す。是れ其の天下の事に通じ、天下の力を得る所以か」（嘉永五年一月一七日）と記している。藤田東湖や戸田銀次郎にも会いたかったが、謹慎が解けてからまもないとの理由で面会できなかった。

水戸での宿は藤田東湖の従兄弟であった水戸藩士の永井政助宅、江戸・飯田町で剣道場・練兵館を開いていた齋藤弥九郎の子息である齋藤新太郎の紹介による。弥九郎は藤田東湖と長年の知己であり、他方で、新太郎は長州藩との交流があり、松陰とも親しい仲であった。そのような関係で、松陰は水戸の有力な学者たちを訪問できたのである。その訪問の間には、宮部や江幡とともに徳川光圀ゆかりの西山荘や藩主の墓所である瑞龍山、斉昭の建てた偕楽園の好文亭をおとずれ、鹿島神宮にも詣でている。光圀と斉昭は水戸学を象徴する藩主、神儒一致をモットーとする水戸学では鹿島神宮にたいする崇拜が篤かった。藩校の弘道館には鹿島神宮の分社が孔子廟とともに建てられていた。

水戸での滞在、わけても会沢との出会いは、松陰の思想形成にとって決定的な意味をもつことになった。松陰は尊王攘夷論に惹きつけられてゆく。水戸滞在中に友人の来原良蔵にあてた手紙でも、「僕水府の遊学頗る益あるを覚ゆ」としたためていた。そのご、一八五六（安政三）年、杉家に幽閉されているときにまとめられた『講孟余話』でも、「余深く水府の学に服す。謂へらく、神州の道斯（道）に在りと」（尽心下第二十六章）とのべている。

その水戸での遊学の益としてあげられるのは、尊王攘夷論を基本から学ぶことができた点にある。江戸にもどった松陰には帰藩命令が出され、一八五二（嘉永五）年五月に萩の杉家に戻るが、そのときに書かれた手記『睡余事録』には、「身皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らざれば何を以て天地に立たん。故に日本書紀三十巻を読み、之に継ぐに続日本紀四十巻を以てす」とあるように、日本という国の特有な国から、つまり「国体」を理解するには日本史関係の書物を読まねばならないことを教えられた。松陰はそれを実行する。『日本書紀』『続日本紀』につづいて、『日本逸史』『続日本後紀』『職官志』『令義解』『日本外史』を読破する。そのほかに、漢籍の『史記』『漢書』『十八史略』もひもといている。

兵学師範であった松陰にとって、読書といえは四書・五経と兵学書。平戸の葉山左内のもとでは、『新論』や陽明学関係の書、それに世界地理書も読むことができて、精神的視界が広がり、水戸学と出会うことで、史書それも日本史にまで拡

大する。さらには、それまでとは違った歴史の読み方に接する。野口武彦が詳しい議論をしているように、水戸学の特質は、「朱子学者たちが注意深く切り離してきた歴史と同時代とはいっしか同次元に連続する」という点にあった。⁽¹⁾ 現実の政治的理念が歴史的思惟によつて再構築されるのである。その年の一二月には藩命がくだり、士籍が奪われ、兵学師範の地位を失う松陰ではあるが、新しい学の領域を見いだしていた。

水戸学と日本史関係書の読書はそのごもつづく。長崎に停泊していたロシアのプチャーチン艦隊での海外渡航に失敗した帰路の一八五三（嘉永六）年十一月、瀬戸内海の船中で、宮部と『新論』を数回よんだことを、兄の梅太郎に手紙で伝えている。一八五四（安政元）年三月には下田から同藩の友人・金子重之助と一緒に海外に渡航しようとして捕らえられた松陰は江戸・小伝馬町の牢をへて一〇月二四日に萩の野山獄（武士用）に収監されるが（重之助は一般庶民用の岩倉獄）、『野山獄読書日記』によると、松陰が獄中で読んだ本はその年のうちに『蒙求』『延喜式』『史徴』からはじまって一〇六冊、翌年の一二月に出獄して杉家に移されるまでに約五〇〇冊にのぼる。経書、史書、地理書、曆書、詩書など広い領域におよぶが、なかでも水戸学関係の書物と歴史学関係の書物が目立つ。会沢の『草偃和言』『迪彝篇』や東湖の『弘道館記述義』『常陸帯』もふくまれていた。野山獄では読書は自由で、兄の梅太郎と叔父の玉木文之進が書物を獄に届けてくれた。

杉家幽閉の身となつても、読書のペースは変わらない。あいかわらず、『弘道館記述義』『新論』、それに会沢の『下学邇言』『豈好弁』や青山延于の『皇朝史略』といった水戸学関係の書物が多く、『新論』については幽閉中だけでも七回も読み返している。氷解しない疑問点もあったのかもしれないが、むしろそれほどまで松陰の心を強く惹きつけた書であったのだろう。日本史関係では、たとえば『日本外史』『古事記伝』『皇朝史略』『中朝事実』『読史余論』『神皇正統記』などがふくまれていた。

日本の歴史を古代から学ぶ。こうして尊王攘夷にたいする信念はさらに確固なものになる。一八五六（安政三年）に執筆

した「斎藤生の文を評す」では「謹んで按ずるに、我が大八洲は、皇祖肇むる所にして、万世の子孫に伝へたまひ、天壤と窮りなき者、他人の覬覦きん（分不相応な望みを抱くこと）すべきに非ざるなり。其の一人の天下たること、亦明かなり」（『丙辰幽室文稿』）とのべていた。天下は、皇祖アマテラスの子孫である「一人」の天皇の天下であると断ずる。

私たちにとって注目されるのは、水戸学の尊王攘夷論は政治思想であると同時に教育目標であり、そして、それは松陰の政治思想であると同時に松陰の教育目標となった点にある。松陰が教育問題について会沢らとどのような議論をしたか、日記や手紙にはふれられていない。しかし、会沢は藩校・弘道館の開設に尽力、初代の教授頭取をつとめていたのであり、そのころは私塾・南街塾で全国各地から会沢を慕って集まった若者たちの教育に専念していた。⁽²⁾胸襟をひらいたふたりの議論のなかで、教育の問題が出なかつたとは考えがたい。やがて、松下村塾で子弟の教育にあたらうとした松陰に少ない影響をおよぼしたと推察される。この点についてはあとでも触れる。

松陰の教育にたいする関心の強さは、旅行中に各地の藩校を訪れていることからもうかがわれる。水戸に入る前には笠間の藩校・時習館を訪問、『孟子』首章の講義をし、会津若松では藩校・日新館の教育制度を調べ、授業を參觀した。帰路でも、仙台では藩校の養賢堂についての詳細な調査をおこない、学頭の大槻磐溪を訪問、足利では足利学校を見学している。

日記には水戸の藩校・弘道館についての記載もない。この点も不可解である。設立から一〇年、弘道館はもつとも注目されていた藩校だったのである。ただ、当時、藩政の実権は反改革派の手中にあり、会沢らは弘道館から締め出されていた。松陰が弘道館についてふれなかつた理由はこのへんにあるのかもしれない。宮部の『東北遊日記』（嘉永四年二月二六日）には、「今は則ち公（徳川斉昭）位を遜り、学校（弘道館）も亦昔日の盛の如くに能はず」と記されている。⁽³⁾

2 江戸遊学——眼は海を超えて

松陰が江戸の地でもっとも信頼を寄せていたのが佐久間象山であった。一八五一（嘉永四）年四月、最初の江戸遊学のときには山鹿素水、古賀謹一郎、佐久間象山といった、江戸の有力な学者の門をたたいたが、松陰を惹きつけたのはその前年に江戸木挽町に開かれた象山の西洋砲術塾であった。その年の一〇月二三日に、叔父の玉木文之進へあてた手紙では、「真田侯佐久間修理（象山）と申す人頗る豪傑卓異の人に御座候」とのべていた。このときは、東北旅行にでかけたため、顔をだした回数は少なかったが、二年後、ふたたび遊学のため江戸に出た松陰はふたたび象山の塾に入る。このときにも、兄の杉梅太郎に「佐久間象山は当今の豪傑、都下一人に御座候」（嘉永六年九月一五日）と書いている。

象山は朱子学者でもある。経学も疎かにしない。だから、いまあげた玉木文之進への手紙には「其の入塾生砲術の爲に入れ候ものにて必ず経学をさせ、経学の爲に入れ候ものにて必ず砲術をさせ候様仕懸けに御座候」とある。経学と砲術の両方に通じなければならぬ、というのが象山の教育理念であった。文武両道を徹底させる。一八五四（安政元）年一〇月に松陰が下田からの密航をそそのかしたという廉で佐久間象山が松代で謹慎の身となったとき著わした『省譽録』でのべていた「東洋の道德、西洋の芸術（技術）」に通ずるといってよい⁽⁴⁾。

しかし、松陰の人生を決定づけたのは、象山が力説した西洋文明の直視、洋学修学の重要性であった。『省譽録』にも、「夷俗を馭するは、先ず夷情を知るに如くは莫^なし。夷情を知るには、先ず夷語に通ずるに如くは莫^なし」という象山のことが見られる⁽⁵⁾。松陰はこの象山の戦略にしたがって密航を企てたのだが、下田での失敗の直後、下田の牢では「夷情を審にせずんば何ぞ夷を馭せん」（『幽囚録』「下田の獄中にて洪木生に示す」との詩を詠んでいた。夷狄の国の実情を知らなければど

うして夷狄をあしらうことができようか。入獄直後の十一月に書いた『幽囚録』では、古代の日本には、「己れを虚しくして物を納れ、人の長を採りて己の短を補ひ、彼の有を遷して我の無を贍^{みた}」していたという。後世の人間も、かつて日本が短を外国の長によって補っていたのを学ばねばならない。『講孟余話』でも、洋学を儒学より上位のものとするべきでないにしても、それを「外道・邪魔として一切に拒絶する」（尽心上末章）のも過ちであるとしていた。

象山の意見を容れて海外へ飛び出そうとさえする。会沢正志斎から学んだのが歴史という縦の時間的な世界であるのにたいして、佐久間象山から学んだのは、海外への視野という横の空間的な世界。松陰は旅の修業によって、この縦と横の時空的な世界に開眼する。

そして、外国の技術を学ぶためには学校の設立が必要であると考えていた。『幽囚録』では、天皇の住む京都の警備のために江戸城に代わる西洋式の「大城」を京都に近い伏見に築いて、そこには西洋式の砲術などを教える「兵学校」を設立するという学校構想を提言する。「夷情を知るには、先ず夷語に通ずるに如くは莫し」、「兵学校」には、外国語学科を設け、オランダ、ロシア、アメリカ、イギリスの書をつかった講義がなされるべきであるとしている。オランダ語のほかにも、ロシア語、英語もふくまれているのは、アメリカのペリーやロシアのプチャーチンが来航し、イギリスが日本をうかがっている外患をふまえた教育政策である。

ただし、洋学的重要性を説いても、外国人の教師は考えてはいない。国内の優秀な人間を各国に派遣して、その国の学問を修めさせて、日本の学校の教師に採用したらよいという。

その四年後の一八五八（安政五）年五月に書かれた上書にも学校設立の構想が認められる。松陰が処刑される前年、松下村塾の塾舎を増築するなど教育に多忙でありながら、日米修好通商条約をめぐって、塾生たちを江戸や京都に派遣するなど積極的な動きをみせていたが、「対策一道」（『戊午幽室文稿』）や「愚論」（同）につづいて書かれた上書の「続愚論」（同）で

は、京都に文武を兼ねた「大学校」を設立する必要性を説く（これらの上書は京都に住む尊攘派の詩人梁川星巖に送られ、孝明天皇にも届けられた）。「大学校」には文武の学生の寄宿舎と銃兵訓練所が建てられねばならず、付属の施設として、製本所、製薬所、鑄銃所、工作所などが考えられていた。さらに、航海学の学科の設立にも言及している。広い意味での兵学校ないし洋学校である。学生には、皇子皇孫から庶民まで、貴賤尊卑のへだてなく集められるべきであるとした。すべての階層の人間に教育はほどこされねばならない、というのが松陰の持論であった。

七月には、日米修好通商条約の締結は国家存亡の問題であると考えた松陰が、それとの関連で、長州藩にたいする提言「急務四条」を書く。そのなかでは、後漢の光武帝が「太学」を創建し、唐の太宗が弘文館を設置し、それによって、天子みずから研鑽していたが、わが藩主もそれに倣うべきである、とのべていた。

おなじところに書かれた「学校を論ず、附、作場」（『戊午幽室文稿』）では、長州藩も人材育成のために「学校」の振興と「作場」の新設を急がねばならないとされていた。「学問」のほか「学芸（技術）」の教育にも力を入れ、兵農曆算、天文地理その他の「学芸」にすぐれたもの、機械や船舶の技術を教えねばならないと主張する。東北旅行では各地の藩校を視察していた松陰であったが、明倫館を離れてからも、藩の教育を気遣っていた。考えは、「兵学校」や「大学校」の場合と変わりが無い。ここでも、「今世、学生は固より已に空疎にして、事務を解せず、工匠は愚朴にして、要需を知らず。二者分れて、鴻溝（大きなみぞ）を為すという」。学問をする人間は空疎な言に陥る傾向があつて、実務的なことを理解できない。逆に、実務にたずさわるものは学問の必要性がわかつていない。だから、両者を一緒に学ばせねばならないという。この教育姿勢が佐久間象山を意識したものであることは、「吾が師象山曰く、学必ず事あり、徒らに空文を誦し空理を弄ぶのみに非ず。書を学び、剣を学ぶが如き、以て見るべし。故に其の礮術（砲術）、自ら称して礮学と曰ふ、亦空文空理を抑へて、これを実事に熟するの微意なり」との付記が見られることから明らかである。

洋学の導入は時代の潮流であり、幕府も藩もその実現に努力していた。幕府はペリー来航の二年後の一八五五（安政二年）に長崎海軍伝習所を開設、その翌年には洋学の学校・蕃書調所を設立している。長州藩も以前から存在していた「西洋学所」を一八五六年明倫館の構内に移転し、一八五九年には「博習堂」と改称、軍事教育に比重をうつして規模を拡大していた。しかし、松陰が心から建設を望んでいたのは、尊王攘夷の精神にたち、それを実現するための学校であったのであろう。小伝馬町の牢獄で死を覚悟した一〇月二〇日に、とくに信頼をよせていた門下生の入江杉蔵にあてられた永訣書のなかで、門下生にその実現を託したのは、「尊攘堂」と「天朝の御学風を天下の人々に知らせ」るための「大学校」であった。「尊攘堂」というのは、記紀の神々や尊王攘夷に尽力した人物を顕彰しようとするものである。

しかし、早急な実現は困難であろうから、京都の学習院を利用するのも一方法であろうとのべていた。そこはほんらい公家の学校であるが、学習院の講釈には希望すれば武士をはじめ、農民でも町人でも聴講できるので都合がよい。⁽⁶⁾「尊皇攘夷の四字を眼目」としながらも、ひろい分野から優れた人物を集め、あるいは各地の優れた人物の見解を求める。そして、そのなかに「史局」を設けて、『六国史』以下の歴史を編纂する。そこには、「尊攘堂」も設ける。

この「天朝の御学風を天下の人々に知らせ」るための「大学校」を設立してほしいとの希望は、門下生にあてた遺書『留魂録』にも、おなじ獄につながれていた水戸の尊攘派の郷土・堀江克之助にあてた書簡にもしたためられていた。ここでも、京都の学習院のほかに、大阪の懐徳堂を利用するのも考えてよいとのべている。漢学を教えた懐徳堂も庶民の学べた半官半民の学校である。

松陰は「学問」と「學術」のための二種類の学校を構想していた。「学問」という点では尊王攘夷の思想教育が、「學術」という点では尊王攘夷のための西洋の軍事技術が重視されていた。水戸学と佐久間象山、両者の見解を継承したのだが、最後の時をむかえても、その早い実現を願っていたのは、尊王攘夷の思想教育のための学校であった。

3 自己確認の旅と読書

水戸の会沢正志斎から学んだ水戸学、江戸の佐久間象山から学んだ洋学。松陰にとっては、それらは対立するものではなかった。水戸学でも洋学でも「実学」という性格が強調されていたからである。

洋学についていえば、それを奨励した八代将軍の徳川吉宗以来、関心は医学そして殖産興業と富国強兵のための洋学にあった。松陰も洋学を自然の説明原理である科学としてではなく、技術の観点から評価していたのは明らかである。期待されていたのは「役に立つ」洋学だったのである。

水戸学も朱子学を基礎としながら、学問・事業一致がモットー、理や気、太極や陰陽や五行といった理論を詮索するのは二義的なことであり、尊王攘夷論による幕藩体制の強化を学の第一の目標としていた。大切なのは経世済民、そのための教育でなければならない。教育と政治は不可分、弘道館の教師も藩政に従事するのが原則、会沢も藩政にも積極的にかかわっていた。このような意味で、水戸学は「実学」、思想を現実化しようとする運動であった。いうまでもなく、松陰もこの意味での「実学」を最後まで志向した。

攘夷のための西洋の技術。「実学」をめざす水戸学はその点にかんするかぎり洋学と対立することはない。それは水戸藩尊攘派の共通の確信であった。攘夷を主張する徳川斉昭は、キリスト教を警戒しながらも、西洋の技術による大砲の製造に精をだす。弘道館でも限定された学生向けではあったが、洋学の講義がおこなわれるようになっていた。⁽⁷⁾

佐久間象山になると洋学にたいする警戒心はない。洋学の理は朱子学の説く理と同質のものであり、洋学を学ぶのは夷狄に屈することではなく、聖賢の道を全うすることであった。⁽⁸⁾『省儉録』では、洋学のなかでも技術の基礎には詳証術(数

学)があつたとして、「詳証術は、万学の基本也。泰西、此の術を發明し、兵略亦大いに進む。匄然、往時とは別なり」と説くことで、「西洋の芸術(技術)」の優位性を主張していたのである。この理解のもとに、前述のように、象山は朱子学の倫理と洋学の実利を併せて学ぶことの必要性を強調していた。松陰もそれを支持する。のちに、『講孟余話』公孫丑上第二章の「上欄」に、「漢学・蘭学各々日の半を以て修学すべき」という象山の教えを今でも思い出すとの朱書を残している。こうして、東北旅行と江戸遊学で松陰の思想は形成されていった。「周遊の益」である。しかし、松陰の全人生から考えてみれば、東北旅行と江戸遊学は萩の少年時代から松陰の心に刻まれていたものをたしかめる自己確認の旅であつた。

父の杉百合之助から四書・五經のきびしい素読の教育をうけた松陰は、五、六歳のころには『論語』や『孟子』を暗唱できた。そして、五歳で藩校・明倫館の兵学師範であつた叔父の吉田大助の養子となり、翌年六歳のときには、大助が亡くなつたため兵学師範の家督をついでからは、近くに住んでいた兵学者であつた叔父の玉木文之進が松陰の教師役を担当、兵学そして朱子学を仕込まれた。親族一同が松陰に大きな期待をよせていたのである。

きびしさを別にすれば、兵学師範として当然に課される修業であつた。しかし、松陰のまわりには他所とはちがった教育環境があつた。外様の長州藩には毛利氏は朝臣大江氏の末裔であるという誇りと徳川家への恨みから(関ヶ原の戦いで西軍の大將となつた毛利氏は、中国地方一〇カ国、一二〇万石から、長門・周防の二カ国、三七万石の大名に格下げされた)、強い尊王の精神が底流していたのであつて、父の百合之助も「恭しくは、大日本は神の国なり」にはじまる『神国由来』(京都賀茂神社の神官玉田永教の著)を愛読していたように皇室を篤く敬慕する人間であつた。皇室敬慕の感情が松陰の周囲には存在していたのであり、松陰もその感化をうけた。

攘夷の思想についてもそうである。この時代長州藩でも日本に來航する船に無関心ではいられなくなつていた。兵学者の松陰にはもちろんである。幼くして兵学師範となつた松陰には玉木文之進のほか、吉田大助の門人が松陰の後見人となつ

ていたが、一五、六歳ころ、そのひとりで、明倫館の師範であった山田宇右衛門からは列強のアジア侵略についての話を聞き、松陰じしんも国防について研究をした旨を回顧している（『講孟余話』尽心下第三五章）。おなじころ、宇右衛門の勧めで、前藩主・毛利斉広の近侍であった山田亦介から長沼流兵学を学びはじめたが、蘭学に詳しく、海防にもたずさわっていた亦介も、イギリスとフランスの手はインドから中国へと伸び、琉球も危なくなっているとの話をしてくれた。それにたいして、松陰は時宗や秀吉のようにはいかなくても、みずからも立ち上がらねばならない、とのべていた（『戊午幽室文稿』「含意齋山田先生に与ふる書」）。列強の侵略を憂い、それとどう戦うかについて、少年の松陰も思い巡らしていたのである。

少年松陰の心の内には尊王の精神も攘夷の精神も存在していた。松陰が下田から江戸に送られる途中で詠んだ歌の「かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂」と『留魂録』の冒頭にのせた「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」に見られる「大和魂」を借りれば、「大和魂」の精神の種子をたくましく育ててくれたのが旅であり、遊学であった。九州の旅では、平戸の佐内のもとで会沢の『新論』に出会い、長崎では西洋の現実に接することができた。最初の「周遊の益」である。それを、さらに確認・発展させたのが、江戸の遊学であり、東北の旅行であった。

4 「華」の地・萩——教育の原点としての孔子

「大学校」や「兵学校」の設立を提言していた松陰がみずからの手で行ったのが私塾・松下村塾であった。私塾一般がそうであったように、外部から財政的な援助がなければ、とくに干渉もない。「大学校」や「兵学校」からはほど遠い、体制とは無縁のごく小さな学校である。そこで、松陰は家族や門下生の協力のもとに、教育の理想を実現させようとして全力をつくしていた。

松下村塾が存続したのは、松陰が杉家の敷地内の小屋を修理、それを塾舎として開始した一八五七（安政四）年一月から、松陰が野山獄に再収監される一八五八年一二月までのわずか一年あまり、その間に教えをうけた塾生の数はおよそ九〇名である。が、松陰は幽閉の身ながら親族や杉家で近在の子供たち相手の指導をしていたし、その前には、野山獄中の学習会に力を注いだ一年強の期間があった。

松下村塾では学年、時間割、試験といった規則的なものはなにもなかった。自由に来て自由に帰る。師の松陰が塾生を相手に自由に意見を交換をする。使われた教材は塾生によってさまざま、経書や兵学書をはじめ、史書、水戸学や陽明学関係の書物など、松陰の読んだ書物のなかからテキストが選ばれていた。身分の制限はまったくなく、ただ、場所柄から武士が大半、多くは藩校の明倫館に通えない下層武士の子弟であった。組織化された教育がなされていた緒方洪庵の適塾や広瀬淡窓の咸宜園と比較すれば古いタイプの塾といえる。

ここで私たちが興味をよせられるのは、松陰は教育をどのように考えていたかということである。

一八五六（安政三）年九月、杉家で近在の若者に個人指導をしていた松陰は、親族の久保五郎左衛門が主宰していた「松下村塾」のために『松下村塾記』を書いていたが、それがそのまま松陰の松下村塾の教育理念であったといつてよい（塾舎を建てたとき松陰はこの名を譲りうけた）。そこで、松陰は、「華夷の弁」を明らかにして、奇傑の人物は、この「夷」の地である萩の村塾から輩出されるはずであるとの期待と自信をのべ、そこでの教育の目的について、「学は人たる所以を学ぶなり」とし、「入りては則ち孝悌、出でて則ち忠信ならしめ」（『丙辰幽室文稿』）んことを期すると書いていた。基本は儒教的な意味での人間教育である。

この『松下村塾記』の一節は、会沢の『下学邇言』に師の藤田幽谷の教育理念として記されていた「人に教ふるに成人の道を以てし、道徳を論ずれば、則ち忠孝に本づく」を念頭において書かれたと考えられる。⁽¹⁰⁾ 久保清太郎への手紙（安政三

年七月ころ)によれば、松陰は『松下村塾記』を書く二カ月前に、『下学邇言』を借用、それを写し取っている。この幽谷のことは、一〇歳のときから幽谷のもとで学び、その学統をつぎながら、みずからも弘道館と塾の教育に心血をそそいだ会沢の教育理念でもあったのはいうまでもない。水戸の会沢からうけた影響はこのようなところにもあらわれていた。

ここでの「人」と「成人」は孔子のことばでは「君子」、「仁」の徳を身につけた人間のことである。だから、幽谷は教育の目的を、「君子」たることであっても「儒者」になることではない、とものべていた。細かな字句の穿鑿に没頭し、学問・事業の一致をおろそかにする「儒者」にはなつてはいけないというのである。^四

松陰も細かな字句の穿鑿にふけるような勉学を戒めた。『講孟余話』でも、「好んで瑣事末節」(告子下第四六章)を論ずる学者をきびしく非難、「凡そ空理を玩び実事を忽せにするは学者の通病なり」(離婁下第二六章)とのべる。だから、著名な学者の集まる江戸で、松陰の琴線に触れたのは象山だけだった。松下村塾の教育でもそれを実践する。塾生のひとりであった渡辺菁蔵にも志の大切さを語つたうえで、「学者になつてはいかぬ、人は実行が第一である」(『関係雑纂』「渡辺菁蔵談話第一」と論じていたという。

学問をとおしてだれもが君子になれる。孔子はそう考えて行動した現実的な理想主義者であった。松陰も野山獄の中で俳句や漢詩の会をひらき、『論語』や『孟子』の講義をはじめていたのである(『孟子』のほうは途中から輪講にかわる)。『孟子』の講義は杉家幽閉の時にも継続され、その内容は『講孟余話』としてまとめられたのだが、その開巻の部分でも、学問をする意味を、「俗情を以て論ずる時は、今已に囚奴と成る、復た人界に接し天日を拝するの望みあることなし、講学切劇^{せつひ}して成就する所ありと雖も何の功效かあらん云々。是れ所謂利の説なり。仁義の説に至りては然らず」(梁惠王上首章)とのべていた。孔子の「仁」のかわりに孟子は「仁義」をつかう。獄中にいるものが学問をしたとしても、なんの益になるのかというものもいるが、それは仁義の考えでない。つづけて、人と生まれて人の道を知らないのは恥かしいことで、

その気持ちがあるなら、どんな状況におかれていても書を読み、人の道を学ばねばならない、とのべて、『論語』の「朝に道を聞きて、夕に死すとも可なり」（里仁篇）を引く。

そうであるから、松陰は入塾を希望するものはだれでも断らなかつた。身分はもとより、基礎学力も問わない。松陰が入塾者に求めたのは学ぶ「志」であつた。渡辺蕎蔵も「始めて先生に見え、教えを乞ふものに対しては、必ず先ず何の為に学問するか問はる」（前出「渡辺蕎蔵談話第一」と証言している。なんのための学か、そこが明確にされていなければならぬ。叔父の玉木文之進の子である毅甫が元服のときに贈つた「士規七則」でも「志を立てて以て万事の源と為す」（野山獄文稿）と記していた。『論語』の「吾十有五にして学に志す」（為政）の「志学」もそのような読み方をせねばならないであろう。それなのに、「志」を誤つた学者のなんと多いことか、いま引用した『講孟余話』の文章のあとには、当今の学者を批判して、「嗚呼、世に読書人多くして真の学者なきものは、学の初め、其の志已に誤ればなり」とのべていた。

もちろん、読書を否定するのではない。松陰は人一倍の読書家だつた。孔子が、「黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず」（『論語』述而篇）というように、人を教える者は日々そのための学習につとめねばならない。肝に銘ずべきは、『論語』の「三省」（学而篇）のひとつ、「習わざるを伝へしか」。自分のものとなりきつていないものを、安易に受け売りしてはならない。松陰も『講孟余話』で「記聞の学を以て師となるに足らず」（離婁上第二三章）とのべていた。もの知りだけでは師となる資格がないが、読書家でなくては教師の資格がない。

松陰がめざした教育は「実学」、松下村塾の松陰は個々の塾生に与えたテキストを素材に、尊王攘夷の観点から現代日本の政治状況を語り、それにたいして正しい行動ができるような塾生の育成につとめていた。言葉よりも実行、『講孟余話』離婁上第二三章では、孔子の「君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す」（『論語』里仁篇）をあげている。

教育についても会沢正志斎や佐久間象山から強い影響をうけた松陰ではあつたが、じつは、彼らとの交わりによって、

